

「家がいいね」 第12号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2005.5.5

山の緑がひときわ濃い時期です。その中でも、外宮の森の高倉山の萌黄色が目立ちます。常緑樹が新しい葉を盛り上げる黄色は、入道雲のように見えます。牡丹の名所の長谷寺の山門、その山の楓への



春の日差し、京都は八瀬での源平桃と鯉のぼりなど、道草の写真をお届けします。



「失敗学」のない社会

1年前に高層ビルの回転ドアに幼児が挟まれ死亡した事故がありました。それをきっかけに取り組まれたドアプロジェクトの報告が、4月末にTVで放映されていました。実験や討議を通じて、実に様々なドアで事故が起きていることに無頓着な日本の技術的・社会的な背景が明らかになります。それは子供や老人などの弱者が犠牲となる「不慮の事故」がいついこうに減らない日本独特の構造でもあります。失敗の蓄積が医療機関から成され、具体的に事故防止の方策を示してゆくオーストラリアの例とは、対照的でした。

日本の企業社会には、何時しか失敗を恐れ、失敗を恥じ、失敗を隠そうとする風土が固定されています。雪印乳業の品質管理の怠慢、三菱自動車のリコール隠し、そして今回のJR西日本の対応など、日常の小さな失敗の隠匿がさらなる悲劇を引

き起こした形です。ヒヤリ・ハットが見過ごされて、大事故になるのは、医療の世界も同じです。会見で最敬礼をしてお詫びをして、結局は「個人」に責任を転嫁してゆくのは、構造的な失敗に目を向けていない証拠です。

本のご紹介

ある日、エルマおばあさんはいいました。「わたしの命は、あと1年ぐらいだろうから、いろいろ準備をはじめないとね……」



5年前に出版された**写真絵本『さよならエルマおばあさん』**。おばあさんが可愛がった猫が語るこの本は、多くの読み聞かせの会で、子どもたちといのちについて話し合う教材になった。作者は写真家の大塚敦子さん。心から敬愛する人が最後の日々をどう生きようとするのか、写真と文章で記録しておきたかった。エルマおばあさんは「入れ歯を外した顔以外なら」と、快く撮影を許してくれた。「ありがとう、また会いましょう」あるいは、「ごめんなさい、許してね」人が生きていくあいだ背負っていた荷物を、人生の最後に「こう言ってお下ろすことができたなら、行く者も残される者も、どれだけが軽くなることだろう。エルマおばあさんは、自分自身の荷物だけでなく、残される家族の荷物も、できるだけ軽くして旅立とうとした。それは、死にゆく人が最後に贈れる最高のプレゼントではないだろうか。

単行本『エルマおばあさんのケア日記』わたしは今がいちばん幸せだよ』も併せてお薦めします。

お知らせ

みえ生と死を考える市民の会 講演会と総会
時：平成17年6月5日(日) 13時から
所：三重県文化会館 中ホール(津駅西口より)
題：「なぜ家なのか」

ホスピスケアの原点を考える

講師：川越厚(かわごえ こう) 医師
在宅ホスピスの草分け、川越医師の活動は、東京の下町で20年続いています。

講演会参加料 当日券 千円

(会員 500円) 前売りは各百円引き

いずれも当院で取り扱います。